

枕草子「をふさの市」について

——岐阜市雄総説の提案——

田 中 新 一

「枕草子」の「市は」の段は次の通りである。

市は たつの市。さとの市。つば市。大和にあまたある中に、長谷に詣づる人のかならずそこにとまるは、観音の縁のあるにや、と心ことなり。をふさの市。しかまの市。あすかの市。

右の内、例えば石田穰二氏訳注「新版枕草子」（角川文庫）によると、「さとの市」「をふさの市」については、所在未詳とする。

前者「さとの市」については、その後、萩谷朴氏が「枕草子解環一」において、「さとの市とは固有地名ではなく、普通名詞である」という明解を提出された。筆頭に挙げられた「辰の市」が平城京の東市で、市司所管の官設市場であるのに対して、大和国内の村里の市として挙げたもの、という解釈である。従って、本文も「さとの市、つば市」と読んで、「里の市（では）海柘榴市（が有名）」と口訳された。下文に「大和にあまたある中に」の主語に思いを巡らせば「さとの市」を普通名詞とする解は至当である。

また、後者の「をふさの市」についての従来説を、萩谷氏は上記の「解環一」で次のようにまとめられた。

をふさの市。

三巻本——をふさの市

流布本——おふさの市

能因本——おふの市

前田本——おうさかのいち

堺本——おふちの市

の四系統の対立異文を挙げ、諸注については、

○三巻本本文を用いたもの

△三河國小総駅とするもの——「枕草子評釈」（金子元臣、明治書院）・「枕草子集註」（関根正直、六合館）・「枕草子」

（田中重太郎、旺文社文庫）・「全講枕草子」（池田亀鑑、至文堂）・「全解枕草子」（三谷栄一、有精堂）・「枕冊子

全注釈」（田中重太郎、角川書店）

△相模國小総駅とするもの——「枕草子」（石田穰二、角川文庫）

△大和国高市郡雲梯郷小房とするもの——「枕草子」（旺文社文庫）一説・「枕草子全注釈」（角川書店）一説・「全

解枕草子」（有精堂）一説・「枕草子」（萩谷朴、新潮日本古典集成）

○能因本本文を用いたもの

△伊勢国生市とするもの——「枕草紙旁註」（岡西惟中）・「枕草子通釈」（武藤元信）

○流布本本文を用いたもの

△伊勢にありとする——「枕草子評釈」（塩田良平、学生社）

とある。そして、これら諸註について、

△三河国小総駅説は、「大和物語」一四四段の

この在次君（中略）心あるものにて、人の国の哀に心細き所々にては、歌よみて書きつけなどなむしける。小総の駅といふ所は海辺にてなむありける。（中略）また箕輪の里といふ駅にて（中略）かくて人の国ありきありきて、甲斐の国に到りて住みけるほどに、病して死ぬとて詠みたりける。（中略）とよみてなむ死にける。

この在次君の一所に具してしりたりける人、三河の国より上るとて、この駅どもに宿りて、この歌どもを見て（下略）

の文章に拠ったものだが、この説は、この一段すべてを三河の国内の出来事と誤解したところから起こった説として退けられた。そして、この段は「大和物語」諸注釈書の引く『延喜式』卷二十八（兵部省の諸国駅伝馬）の「相模国駅馬。坂本廿二疋。小総・箕輪・浜田各十二疋」の記事に従って理解すべきものとされた。

△相模国小総駅説は、これに従ったもので、相模国足柄下郡酒匂の地を推定したもの。しかし、これについて萩谷氏は、「駅」の所在地を即「市」の所在地とはなしたいと批判された。また、右の「大和物語」の文章については、高橋正治氏が「三河、相模、甲斐という順序で上京するのは不合理である。隱題歌の配列に興味の中心があつて地理的合理性ははじめから問題にされていないという説もあるが、一段の中でのこの不合理は、なお考える余地がある。」と「日本古典文学全集」頭注で付言されている。まことにもっともな発言である。この大和物語の一文を典拠として「をふさの市」を考えることには問題が多い。

△伊勢国生市説については、論拠の不明性が、また、

△伊勢にありとする塩田説については、依拠本文の混同が指摘された。

こうした論究の果てに、萩谷氏は、大和高市郡雲梯郷小房を自説として挙げ、次のような解説を加えられた。

「全解・旺文・全注釈・集成すべてその根拠を示していないが、本段に京中の市としての辰の市に対して、大和の国の中の村里の市として挙げた中、海柘榴市に続くものとしての「をふさの市」を考えるならば、これも亦、大和国中に存在するものと見るのが、きわめて消極的ながらその論拠となる。「里の市」と、村里の市を指定しながら、「海柘榴市」一つでは、体を為さないからである。雲梯郷小房は、八木の南、橿原の北、正に平城京から吉野に通ずる街道に沿って、市を開く場所としては不足はないものと推定する。」

つまり、里の市として挙げた大和国の事例は、「つば市」一例にとどまるとは見ない方がよいという、消極的理由で主張されたものである。

しかし、その論拠はいかにも弱い。「をふさの市」に続く「しかまの市」も大和ならばまだしも納得が行くといえよう。だが、「しかまの市」は播磨国飾磨郡と見るしかない。

「里の市」として「海柘榴市」一つでは体を為さないとされるが、それに続く「市」はすべて大和のそれではないにせよ、いずれも「里の市」であり、論理の首尾は十分に一貫している。「大和にあまたある中に……」の一文は、「里の市」の代表として、なによりもまず「つば市」を挙げた理由付けとして述べたものとみるべきであり、それは後に続く「をふさの市」の帰属地域まで規定している文脈とはとても思えない。

また、末尾の「あすかの市」を大和の市として「地域的回帰性」で説明しておられる（同「解環」）が、そのためには、それに先立つ「をふさの市」を「しかまの市」とともに大和国の外と見た方が「回帰」という面で論理的であろう。「しかまの市」一項だけが大和国外で他はすべて国内の事例というのは「回帰」よりむしろ「脱線」と見た方が理に合う。

以上の理由で、「をふさの市」を大和国内と見る必然性はないといえよう。すくなくとも「大和小房」を主張する積極的理由は見出せない。

ならば、「をふさの市」とはこのことであろうか。



その私見を述べる前に、確認しておきたいことがある。「つば市」を村里の市として挙げた後に添えた注記的文章である。

大和にあまたある中に、長谷に詣づる人のかならずそこにとまるは、観音の縁のあるにや、と心ことなり。

大和の国に数多くある市の中で、長谷寺詣の人々が、この「つば市」に足をとどめ、身を寄せて、その繁栄をもたらしているのは、観音の靈験によるのかと思考する。村里の市として栄える要件に初瀬観音の力を想起したのである。王朝文学において初瀬観音詣について触れた事例は数限りない。「源氏物語」における、玉鬘や浮舟の初瀬詣が物語の重要な契機になったことはよく知られたところだし、「蜻蛉日記」「更級日記」における作者たちの詳細な初瀬観音詣の記に信仰の深さがうかがわれるが、その他、思い出す事例をあらあら拾ってみても、

□「古今集」春上・四二

初瀬に詣づるごとに、宿りける人の家に、ひさしく宿らで、
ほどへてのちにいたれりければ、かの家のあるじ、「かく
さだかになむやどりはある」と、言ひいだして侍りければ、
そこにたたりける梅の花を折りてよめる

人はいさ心も知らずふる里は花ぞ昔の香ににほひける

□「うつほ物語」藤原の君（大系、一・180頁）

大徳のいふやう「かたきを得んずるやうは、比叡の中堂に、常燈を奉り給へ。又、奈良、長谷の大悲者、人の願満て給ふ。竜門、坂本、壺坂、東大寺、かくのごとく、すべて仏と申すもの、土をまろがして、これを仏といはば、御みあかし奉り、…」

□「同」国譲下（大系、三・334頁）

宮のうちよりはじめて、左右の大殿、朱雀院よりも誦經の使のりつれてゆきつがひつ、初瀬、壺坂までよろづの所々にまうで、左右の大臣、御子達も皆おはしましぬ。

□「平中物語」（大系、100頁）

さて、この親、忍びて初瀬へ詣でけり。ともにこの男も詣でけり。

□「平家物語」卷十二、六代（大系、下・397頁）

この三とせが間、夜昼肝心を消しつ、思ひまうけつる事なれども、さすが昨日今日とはおもひよらず。年頃は長谷の観音をこそ深く頼み奉りつるに、つひにとられぬ事のかなしさよ。

など、広く信仰を集めていた跡をいくらかも検証することができる。

清少納言が大和の「つば市（海柘榴市）」を里の市の代表として挙げて、その盛況の原因として観音の効験に思いを寄せたのも無理からぬことであろう。

ところで、「をふさの市」に続く「しかまの市」「あすかの市」は、どんな意味合いが込められているのだろうか。

「しかまの市」「あすかの市」に共通する要素を、前の「つば市」から引いてみると、そこにも観音の里の市が浮かんでくると言えようか。

「しかまの市」は、播磨の国飾磨の里にあり、市川下流右岸にあつて、播磨国府のすぐ近くに当たり、市川によって播磨灘に通じる交通の要地であつた。現在の姫路市市之郷に比定されている。(国史大辞典)

恋をのみしかまの市にたつ民のたえぬおもひに身をやかへてん(千載・俊成)

君がうたしかまのいちとみしかどもかちのなきこそあやしかりけれ(続千載・俊恵)

秋くればしかまのいちにほうかちのふかき色なる風の音かな(夫木・如願法師)

などと詠まれている。

この市の近くには、西国三十三所観音として名高い書写山円教寺がある。創建者性空上人が書写山に入ったのは康保三年(九六六)といわれるが、その四年後の天禄元年(九七〇)はじめて如意堂が建立されたという。「元享釈書」によると、性空の庵室の傍らに桜桃樹があり、一日天人が降臨し偈を作つたので、性空はその枝を切り、根株の所に、弟子の安鎮に命じて一尺五寸の如意輪観音を刻ませたという。この観音の靈験がすこぶるあらたかで名を得ることになるが、興隆のきっかけは、寛和二年(九八六)の花山法皇の御幸であつたという。播磨国司が法皇またはその側近と親密な関係にあつたため性空の書写山への御幸となつたとの説もある。(以上は『姫路市史』第三巻による)

「あすかの市」は、大和の国高市郡飛鳥の里にあつた市と思われる。比定すべき現在地は未詳だが、五世紀から七世紀にかけて政治文化の中心地として繁栄した故京なので、里の市として名を得る可能性は高い。現明日香村の内、特に飛鳥寺・川原寺・橘寺・板蓋宮推定地を含み込む飛鳥川流域の交通の要路にあつたものであろう。高市郡という郡名も何に由来する名であらう。

「あすかの市」を詠んだ歌は中世の次の事例しか見あたらない。

名所市 今日暮れぬあすかの市に急げ人うきをばかふる事のありやと(為尹千首)

が、「あすかの里」の歌は古来数多い。

飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ（万葉・巻二）

あすからは明日香の里をいでていなば君があたりをみずやなりなん（古今六帖・第二）

卯の花の咲ける明日香の里に寝てまだき明けぬと驚かれつつ（山家五番歌合）

ここに取り上げようとする岡寺はこの明日香の里にある。正式には龍蓋寺と言ひ、これも後世三十三所観音の一つに加えられた名刹であり、弘法大師作と伝える丈六の如意輪観音を本尊とする。

「今昔物語」巻第十一は、「義測僧正、始造龍蓋寺語」の説話を今に伝える。天智天皇の御代の化生の人といわれる義測僧正の話である。「其ノ父母、大和国、市ノ郡ノ天津守ノ郷ニ住ミテ年来ヲ経タルニ」とあり、「市ノ郡」についての日本古典文学大系の注では、「諸本脱字。高市とあつたものであらう」とするが、古名とか、略名という可能性も考えられよう。市のあるさと（里）として名を得ていたものかも知れない。この夫婦が、子のないことを嘆き、年来観音に祈願して芳香端正美麗の男子を授かったという。天皇はこのことを聞いて召して皇子としたが、仏道に入り、僧正になった。「其ノ家ノ所ヲバ、伽藍ヲ建テテ、如意輪観音ヲ安置シ奉レリ。今ノ龍蓋寺ト云フ、是也。靈驗新タニシテ、諸ノ人首ヲ舉ゲテ詣デ、願ヒ求ムル所ヲ祈リ請フニ、必ズ其ノ驗シ有リトナム語り伝ヘタルトヤ。」とある。この話は、「東大寺要録」巻一や「扶桑略記」巻五にもあるとのことである。（大系注）

岡寺の如意輪観音に関わる靈驗説話であるが、飛鳥の市にほど近く、尊崇を集めた観音として古くから語り伝えられたものであらう。

このように見てくると、「しかまの市」「あすかの市」はともに平安朝期に栄えた里の市としてあり、「つば市」と同様、ともに近在の観音の靈驗に預かっていた事例として挙げられたものではないか、と気付かされる。



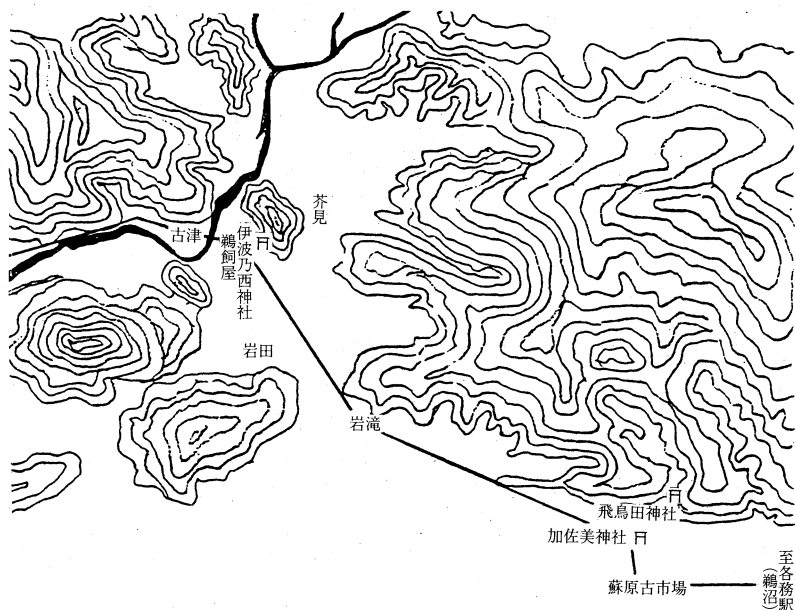
如上の線上で、「をふさの市」を考えると、「つば市」と「しかまの市」「あすかの市」に挟まれる形で挙げられている所から、これも近くに著名な観音を抱えた里の市の可能性が強い。

結論を先に言うならば、私は、美濃の国方県郡雄総の里を挙げたいと思う。

雄総の里には、護国之寺（ごこくしじ）があり、本尊は十一面観音で、おぶさ観音と呼ばれている。美濃の国で、古来著名な観音は、後代、西国三十三所観音霊場巡礼の満願所となる揖斐郡谷汲山華嚴寺である。初瀬（十一面観音）・飾磨（如意輪）・飛鳥（如意輪）に並べられるのはこの寺（本尊の十一面観音）だが、雄総の里には遠く、古代東山道筋よりややはずれて奥まっている点、初瀬・飾磨・飛鳥と情況がいささか異なる。隣接地に観音寺を合わせ持ち、街道筋に近い要衝にあって、「をぶさ」の地名を持つ里という条件を立てる時、この方県郡の雄総を措いて地にはない。現岐阜市長良雄総の地である。

『岐阜市史』ほか諸書を参考に、古代の美濃国駅路を概観すると、美濃国を東西に貫通する東山道には、「延喜式」によると、西から不破駅・大野駅・方県駅・各務駅・可児駅・土岐駅・大井駅・坂本駅を経て東隣信濃国に入る。その各駅の設置された駅家の位置の比定には諸説があるが、大野駅と方県駅の両者については説の対立が見られる。うち、当面の方県駅は現岐阜市域に属すると考えられるが、その駅家の所在地としては現岐阜市合渡または長良の両説がある。『濃飛両国通史』『岐阜県交通史』『岐阜市史』等地元の歴代主要史書はすべて長良地区を支持している。（『岐阜市史』通史編 原始古代中世 379～381頁）

当該方県駅家を含む方県郡には、「倭名抄」によると、村部・大唐・鵜養・方県・思淡・（駅家）の郷名が見える。いずれも長良川以北の現岐阜市域に比定できる。この点からも方県駅は長良地区説の方がよい。



そのうち、鵜養郷は、現岐阜大学所在地で、黒野地区に当たり、鵜飼黒野の呼び名を今に残している。「日本霊異記」中巻第四に、

聖武天皇の御世に、三野の国方県（現岐阜県）の郡小川の市に一の力女有り。人と為り大きなり。名を三野狐とす。力強くして百人の力に当る。小川の市の内に住み、己が力を持ち、往還の商人を凌げ弊ひ、其の物を取るを業とす。

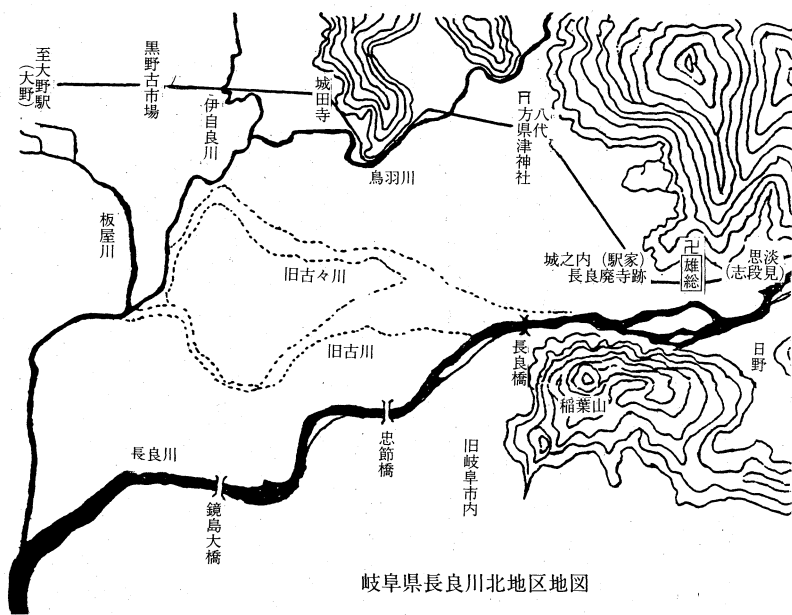
に始まる説話があり、そこに尾張に住む小柄の力女（道場法師の孫という）が挑戦して、打ち勝ち、

「今より已後、此の市に在ること得じ。若し強ひて住まば、終に打ち殺さむ」といふ。狐打ちひそめらえき。其の市に住まず、人の物を奪はず。彼の市の人物て皆安穩を悦びき。

とある。長良川の水運と、東山道の陸運とが交差する、この小川の市の賑わいが伝わってくる。今、黒野古市場と呼ばれている。

その鵜養郷の東隣には、式内方県津神社を中心に城田寺

枕草子「をふさの市」について



岐阜県長良川北地区地図

から長良福光地区が拡がっている。そしてこの方県郷の東境、現岐阜市長良城之内には、七世紀末ごろ創建されたといわれる長良廃寺跡が確認されている。近年黒野地区に移転するまでの岐阜大学教育学部・教養部や、長良高校の所在地である。遺跡の規模や伽藍の状況は不明だが、複弁蓮華文の軒瓦や格子目状の平瓦の出土から七世紀末の創建と想定されているのだが、八世紀前半ごろの出土品が多く、その頃整備された遺構のようで、中には全国的にも例のない人面付きの軒丸瓦も出土し、そのありようは、この長良廃寺の位置した付近が方県郡の中核たる駅家のあった所と考えられていることと関連しているようである。(上掲『岐阜市史』486頁)

この東隣の思淡郷は、現長良志段見に郷名をとどめ、その郷の西端の地に、右の城之内地区に隣接して、雄総の里があり、ここに天平期に創建された護国之寺がある。

護国之寺の本尊及び伝来の仏鉢について、上掲『岐阜市史』通史編はいう。

聖武天皇の東大寺大仏造営の際、行基を諸国に派遣し

て治工を尋ねもとめさせたところ、厚見郡日野の郷に金王丸という童がいてよく仏像を図すので、都にて大仏を鑄造させた。この金王丸が「甫（ハジ）め試みに鑄せし観世音（千手ともあるいは十一面ともあり）の像」が護国寺の本尊となったという。また、「大仏成就供養の日、紫宸殿の前庭に紫雲一叢覆ひ来りてひとつの佛鉢を降らし、雲中に声ありて、玆鉢は是釈尊御在世靈鷲山にて持給ひし佛鉢なるを、希有の大像供養の仏事を天感ありて降す所なり」（『新撰美濃志』「岐阜県史 通史編 古代」といふ）。佛鉢は現在寺に残る金剛獅子唐草文鉢である。金銅製で表面に獅子や宝相華文が線刻された優品である。奈良時代末期の製作とされ国宝に指定されている。本尊は塑像の一部と思われる断片が残っている。もともと千手観音の頭部で等身大の仏像であった。（487頁）

現在この寺は岡の中腹に位置しているが、奈良時代末期の創建当時、堂宇は丘陵下の平地に立てられていたとされるので、その後の幾度にもわたる長良川の氾濫によって被害をうけたろうことが想像される。残念ながら現在では盛時の姿を望むべくもないが、中濃地方の中核たる方県郡の上述の式内社（方県津神社）・駅家（長良廃寺跡）・市場（小川市）といった諸遺跡に程近く、しかも古代東山道にも沿っており、国宝の佛鉢まで伝える古刹として、往事の様相の一端は推測出来よう。

東山道は、この方県郡思淡郷を抜けると、長良川を渡って各務郡に入る。この街道筋の特定が本稿では推論の要なので、その先についても触れて置かねばならぬ。各務駅家を含む各務郡には、「倭名抄」によると、村国・大榛・各務・那珂・芥見・三井・（駅家）の郷名が見える。そのうち、方県郡に隣接するのは芥見郷であり、その境域には長良川が流れている。方県駅（長良）から各務駅（鵜沼）に延びる東山道の長良川渡河点はどこか。『各務原市史』通史編、（自然・原始・古代・中世）によると、次の二説がある。

一、長良古津より鵜飼屋へ

一、雄総より日野へ

通説の前者に対して、後者は右岸微高地に祭祀遺跡があることや、室町期の一条兼良「藤河の記」に歌われた「尾総の橋」の存在から推定された説である。平安時代の論拠としては弱い。

私は、岩田の伊波乃西神社に注目する。「延喜式」神名帳の美濃国三十九座の内、各務郡七座に、村国神社二座、飛鳥田神社、村国真墨田神社、加佐美神社、御井神社とともに挙げられた式内社である。芥見地区の西縁にある清水山の中腹に墳墓として葬られていた祭神日子坐王皇子をまつた神社で、近世は岩田村に属し、長良川に面した鵜飼屋の集落にある。現在は岐阜市である。式内社は国家祭祀としての祈年祭に幣帛奉獻の神社で、各地の尊崇を集めていた神社で、人の多く行き来する街道筋近辺に多い。右の七座にしても、村国（各務）・飛鳥田（蘇原）・村国真墨田（鵜沼）・加佐美（蘇原）の各神社は、東山道筋と思われる通称芋ヶ瀬街道に沿っている（千メートル以内）。従って、伊波乃西神社と同様と考えてよからう。長良古津で渡河すれば、神社の直前である。一説の「雄総——日野」渡河の場合でも「渡つて後は左岸を岩田地区まで北上したのはほぼ確定」とするのは、伊波乃西神社を配慮しての言説であらう。でなければ、日野に渡れば、通常なら桐野・西市場と平地続きで芋ヶ瀬街道に出る筈で、無理に川の左岸の険峻の行程を進む訳がない。里程とて古津回りの方がやや短い。東山道は、雄総からさらに右岸を古津まで遡つて後、渡河し、岩田の野に上がり、伊波乃西神社のあたりから、芥見の里をかすめて、岩滝・伊飛嶋・古市場（蘇原）と進み、現芋ヶ瀬街道を鵜沼まで東進したものであらう。

伊波乃西神社の岩田の里こそ、「金葉集」（二度本）・「千載集」所収の藤原伊家の

今はしも穂に出ぬらむ東路の岩田の小野のしののをすゝき

と詠んだ「岩田の小野」である。ここの「東路」は東山道の意。この地を含む芥見地域には今も「篠田（しのだ）」

姓が圧倒的に多い。(新日本古典文学大系『金葉和歌集 詞花和歌集』では、八代集抄に美濃とあるも所在地未詳とする。同『千載和歌集』も同様である)

こうして、西方大野郡から方県郡に入ってきた東山道は、鵜養郷(現黒野古市場)、方県郷(現城田寺・長良福光・長良城之内)、思淡郷(雄総・古津)を東進し、長良川を渡り、各務郡に入り、岩田、芥見郷南部をかすめて岩滝で芋ヶ瀬街道に出て更に東進して鵜沼に至ったものと思われる。

以上の地誌的考察をもとに、枕草子「をふさの市」の呼称について考えると、この思淡郷西端の雄総観音の里は、方県郡の中心地たる駅家(現城之内)に地続きなので、そこに相應の市場を持っていて、それが「をふさの市」と呼ばれていた可能性を考える事ができる。遺憾ながら「市」の所在を枕草子以外に確認できる資料を持たないことが弱点である。しかし、その点に関しても、萩谷氏が大和高市郡雲梯郷小房に比定されるに当たり「小房は…平城京から吉野に通ずる街道に沿って市を開く場所として不足はない」と言われた推論程度の蓋然性は満たしている。今後はむしろ、この「枕草子」をこそ「雄総の市」の貴重な一資料とする事もできるのではないだろうか。

また、どうしても依拠資料をいうことならば、前記の小川の市が、この雄総観音から数キロの近地点にあり、ともに方県郡を代表する市場および観音として知られ、靈異記に「小川の市」と呼ばれた市場も、平安朝期になって雄総観音の名が高まるにつれてそれに惹かれて「雄総の市」と言われるようになっていたものと考えられることも出来るのではないだろうか。ちなみに、「小川」は雄総の里を流れる大川長良川の支流伊自良川の謂いである。

以上より、清少納言は里の市として初瀬の「つば市」を挙げ、観音の縁に言い及んだところより、「そういえば同類の市として…」という思いで、「をふさの市」「しかまの市」「あすかの市」を挙げたものであろう。大和の「つば市」に次いで、東国美濃の「をふさの市」、西国播磨の「しかまの市」と挙げて、再び大和の「あすかの市」に回帰した

枕草子「をふさの市」について

ものであろう。